横浜空襲体験記

藤倉和明（習志野台・61歳）

あの日は朝から晴れていた。いつものように、勤労動員に出かけようとしていると、警戒警報のサイレンが鳴り、ラジオが敵機の接近を告げた。アルミニウムの弁当箱は、母の手作りの黒っぽい木綿のショルダーバックに入れてあった。

何となく、今日は来るぞ、という予感がして勤めは休むことにした。三月十日の東京大空襲はついこの間のことだったし、横浜も散発的には被害を受けていた。日本中の大都市は殆どもれなくB29の空襲を受けており、横浜もいつかは洗礼を受けるものと覚悟はしていた。

我家では、いざという時、すぐ近くの祖母の家の小さな防空壕に避難するか、家の裏手の崖に掘った大きな防空壕に入るかどちらかにしてあった。祖母の家は我が家から二、三分の所にあり、少し小高い所にあった。北側の崖に小さいながら横穴式の壕を作っておいたので、ここに身の廻りの物を運び込むことにしてあった。荷物は小さな鞄や風呂敷包が五、六箇で、運び役は母と私と姉だった。私は当時十六才、旧制横浜一中の四年生だった（今の高一）。姉は専門学校（今は大学）を出てから軍関係に勤めていた。弟は小学生で湯河原温泉に学童疎開していた。兄は私より二才上だが、脳性小児麻痺で歩行も不自由で避難の際は大てい母がおぶっていた。

祖母の家といっても、祖母はその年（昭和二十年）の四月に死去。叔父夫婦と三人の幼児がいた。

ところで、今日はいよいよB29来襲かと思っていたのだが、ラジオで敵機は名古屋方面に向ったとの報道があり、やれやれと思っていた。荷物の運搬も見合せ、私は玄関で本を読んでいた。友人から借りた、吉川英治の「宮本武蔵」だった。どの位そんな風にしていただろう、突然キーンという爆音が耳に入って来た。戦闘機の音だ。P51かも知れない。遠くでバリバリ、ドシンという音がしている。「空襲だ！」とあわてて母と荷物を運び始めた。祖母の家に着くとすぐ、B29のあの腹の底に響くような爆音がしてきた。と同時にあたり一面にバラバラ、バリバリと機銃掃射をするような音がしてきた。爆弾もこわいが、どこからともなく突然現れる戦闘機からの機銃掃射は不気味でこわい。一瞬立ちすくんでしまい、家までまた荷物を取りに行く勇気が出なかった。しかし、それでも母はまた運びに出て行った。すると又、雨でも降ってくるような、ザーザーという音がしたと思うと、シュルシュル、ヒュルヒュルという音がしてきた。と間もなく、バシン、ドシン、シュポッ、というような音と共に、目の前の軒先に妙に赤っぽい焔が突然現れた。

「焼夷弾だ！」

あわてて火消し棒（なわを何本かまとめて、はたきのように長い棒の先に

つけたもの）に水をつけてたたいてみた。消えるどころか、かえって、なわの先に焔がうつってしまった。真黒な煙を出して燃える焔は何だかベトベトした感じだ。成程、油脂焼夷弾だ。最初の部分は何とか消し止めた。やれやれと思ってまわりを見てびっくりした。あっちの方でチョロチョロ、こっちの方でもチョロチョロと燃えているではないか。応援を頼もうと思ったが、叔父や叔母の姿が見えない。焼夷弾落下の合間をぬって、母屋の方へ探しに行ってみた。庭のはずれの方へ行って驚いた。

祖母の家は少し小高い所にあったので、町全体を見おろす位置にある。いつの間にか、その町全体からこちらに向って煙が吹き上げて来ているではないか。焔こそすぐ目の前には見えないが、もくもくと盛り上がる煙。その煙の中を吹き上げられた燃えかす、紙くず。それにトタン板のようなものまで飛んでくる。

「これはいかん」

と、思った。叔父さん、叔母さんは必死になって家の各所で燃え上がる焔を消し廻っていた。しかし、すぐ前まで迫って来た火焔を見ると

「もうここにいては危ない。裏山に逃げよう」

ということになった。

母は兄を背負い、裏山への細い道をのぼりはじめた。その途中で見た我が家が見納めだった。今でも目に焼きついている。丁度上から見おろす位置にいたので、瓦屋根の一角にとりつけてあった物干場の二、三箇所で、例の赤い焔が黒い煙を出して燃えていた。その時は、この程度で、別に家が燃えているわけではなかったのだが、後からよく調べてみると家中あちらこちらに何発も焼夷弾がつきささっていたことがわかった。（家の間取り図を想い出しながら画き、焼夷弾の落下場所を書き留めた図が、今もどこかにしまってある。）

裏山にのぼる道は粘土質ですべりやすく、気はせくし、いつ上から焼夷弾が落ちてくるかも知れず、またP51の機銃掃射に出合うかも知れないと思うと、足もすくむ思いだった。

半分程のぼった所で、母にかわって私が兄を背負うことにした。しばらく行くと、曲り角にさしかかったが、大きな牛がいるではないか、やせた赤牛だった。近所で荷車をひかせていた牛だった。牛も火に追われて、ここまでのぼってきたらしい。崖の隅に鼻づらをつけるようにしていた。牛のしっぽになでられるようにして、こわごわそこを通り抜けた。今思えば、牛もこわかったのだろう、一緒に山の上まで連れていってやればよかったと思うが、その時はとてもその余裕はなかった。

やっと山の上に出た。ここから町は一望なのだが、もうその頃は焔と吹きあげる煙とで家並みは判然としなかった。

さて、ここから山の裏側にある大きな横穴式防空壕まで行かねばならない。山の上は一面の草原で身をかくす所はどこにもない。立木もない。ただ所々畑になっていて、葱が植わっていた。平和な時は、よくここでトンボ釣りをしたものだ。

このむき出しの草原を半分ほど行った所でまたB29がやって来た。雲のように空を覆う煙の合間から、ゆったりと飛ぶB29の大編隊の姿が見えた。よく見ると、何やらゴマ粒をまいたように黒いものが沢山降ってくる。風に乗って次第にこちらに向ってくるようだ。ゴマ粒のようなものが、だんだん細長い物に変ってきた。

「これはいかん。焼夷弾だ。」

もうその頃になると、ザーザーという例の雨の降る音がしてくる。黒っぽ

いマッチ棒のような物に、空色の細長い布がひらひらとゆれながらついているのが見える。もうそうなると、ヒュルヒュル、シュルシュルという音になってくる。かくれる所はない。わずかに畑のへりの草むらにへばりつくばかりだ。三六〇度、東西南北、どちらを見廻しても、空一面の焼夷弾の雨だ。逃げようがない。仕方がないとあきらめた。頭に直撃をくらうか、ベットリとあの真紅の焔をあびるかどちらかだ。

身動きも出来ず、空を仰いで、自分を目がけて落ちてくる焼夷弾を目で追う。いっせいにあたり一面に落ち始めた。一番近くに落ちたのは十米程離れた葱畑の真中に音もなく突きささった。と思うと、スポッというような音と共に花火のように紅蓮の焔が舞い上がり、ある高さまで上ると今度は、フワッと音もなく四方八方にベトベトした焔を振りまいた。

乾いた土の上や、緑の草の上で、落ちた焔はチョロチョロと燃えていた。崖下の家に落ちたのであろう。バリン、バリンと家の屋根をつらぬく音がする。生きた心地がしないとはあの時のことだと思う。

ふと気がついてみると無傷だった。至近距離十米の所で難を逃れたのだ。ほんの一寸走るのが遅かったら・・・と思うと身ぶるいした。

あたりを見廻すと、母と私達だけだった。叔父や叔母達は後になったのか、先に行ったのか記憶にない。

焼夷弾の落下が途切れたところで、急いで山を降り防空壕にかけ込んだ。やっと人心地ついてみると、父も姉もいないではないか。いつも一緒に避難していたのに、今日はあまりに突然の空襲で別れ別れになったらしい。とすると、我家のすぐ裏の大きな防空壕に入ったのだろう。そうならよいが。でも、もし祖母の家に来ようとして、途中で焼夷弾の直撃を受けたということはないだろうか。

朝からの空襲から何時間か経ち、警報も解除になったようなので皆と一緒に山を越え、もと来た道を戻り、祖母の家のところに出てびっくりした。何もない。火事の焼け跡ならもう少し何か残っていてもよさそうなのに。地上に立っているものは何もないのだ。立木でさえ根元の方まで焼け落ちている。祖母の家の防空壕は小さかったから、中の物はきっと焼けてしまっただろうと思ってのぞいてみると、湿気のせいか、皆無事だった。運び込んだ鞄やら風呂敷包みが全部なんともなかった。これだけが残ったものなのだ。

丁度この時、父と姉の無事な姿に出合った。二人とも煙りにむせて苦しかったらしい。目が真赤だった。でもお互いの無事を喜び合った。

さて、我家はどうかと急いで降りて行ってみてまた驚いた。電線がからみ合っている中に、よく見ると、自分が大事にしていた机の中のガラクタが焼けただれてころがっているではないか。小さな缶に入れておいたコインの無残な姿。何か白い灰のようなものがパラパラ揃っている所をよく見ると、これは本だ。おや、活字が読めるぞと、つまもうとするとハラリとくずれ落ち、ただの灰になってしまった。まだ奥の方では真赤にもえているが、本の姿は留めている。何か薬でもかけて元の姿に戻せぬものか、と思った。

玄関の上りかまちに置き放しにしてきたショルダーバックの中のアルミの弁当箱はくしゃくしゃの残がいになってしまった。「宮本武蔵」は姿を留めていなかった。かわりに、無気味な焼夷弾の焼けただれた長い筒がころがっていた。

あたり一面急に見晴しがきいて別世界に来たようだった。焼け跡を歩き廻ったせいで、折角の革靴も底が焼けて、一日で穴があき駄目にしてしまっ

た。

いつの間にか日も暮れ、その晩は祖母の家の防空壕で過ごすことになった。近所の人も一緒だった。その家で飼っていた鶏をごちそうしてくれた。ローストチキンだった。焼け跡からひろってきた鍋やどんぶりで食事をしたが、一見何ともないような米や大豆もいざ食べてみると、いぶりくさくて、とても食べられるようなものではなかった。

焼け落ちた町は、あちこちで赤く余燼(よじん)がくすぶっていた。暗闇の中にちらちらと燃える赤い火が妙に美しかった。しかし、あたり一面、すえたようないやな匂いが、いつまでもただよっていた。

（昭和二十年五月二十九日の横浜市西区南軽井沢での被災体験を記す。）

